得たのは、吉田家との緊密な関係を抜きにして考えられないと思われ、両者の関係はその後の後世派医学の発展に大きな影響を与えたことが想像される。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所）

名古屋玄医の医学思想と『医方問余』について

花輪壽彦

名古屋玄医（一六二八―一六九六）はいわゆる「古方派」の嚆矢として有名であるが、その医学思想と数多い彼の著作についての詳細な吟味は、未だ甚だ不充分である。

よって、彼の医学思想と代表的な著書とされている『医方問余』について若干の考察をしてみたい。

彼の医学思想の根本は一つは「貴陽」（陽を貴ぶ）であり、もうひとつは「歴試」（歴ねく試みる）であると思われる。

「貴陽」とは『陰陽応象大論註疏』の中に、「貴陽は枢業（素問・霊枢）の本旨なり、易の義なり」「四百四病ひとり一陽の欝と衰とにて起らざるはなし」とある如く、病気の原因を中国医学に伝統的な「陰陽論」に立ちかえって説き、陽気を生命の根元とし、陽気を助けることを治法の原則とする考えである。この考えは金元以降の中国医学が「臓

腑」の陰陽・虚実、五行配当による病理と、とかく思弁に傾き、さまざまな医説が氾濫していった点に対する批判として、思弁的な病因の穿鑿を保留する意味で提出されている。

また思弁的な議論に対する批判は、経験主義的な事実の重視へと移行し、この点が「古方派」と称されるグループに共通した臨床的な態度となるが、名古屋玄医の中にはっきりとこうした姿勢がみえる。

『丹水子』中に「歴試する所無くして、直ちに医書の述ぶる所を以て之を療して、多く敗を取ればなり。今の人、他邦の医と聞くときは、則ち軽々しく信じて之に投ず。是何ということぞや。」と歴試の重要が述べられている点がそれである。『丹水子』の中には喩嘉言は『医門法律』を作りて、『金匱要略』を註し、『尚論篇』を作りて『傷寒論』を註す。諸氏に卓越すること甚だ遠し。然るに『寓意草』に曰く、『疫を治するに敗毒散を用いて人参を倍すれば治する者多し』と。これ未だ俗習を免れず。予肯てこれを信ぜず。これによって二書の言もまたかえって疑を生ず」とあり、こうした批判精神が自らの経験による、薬効の実際的な評価の重視となっていく。

『医方問余』(延宝七年自序、十巻)は、眼科門五巻・外科門五巻・口科門一巻・小児門二巻・婦人門二巻をも合せると厖大な書物で百科全書的なニュアンスの強い注解書であるが、「貴陽」思想による中国医家の批判と、「歴試」に基づく「自家経験方」を諸所に提示している点が特徴である。

本書の冒頭には「万病は皆、風寒湿にて生ぜざるはなし。細分すれば則ち風寒湿の三気なり。総言すればただ一箇の寒気のみ。寒気の人を傷るなり。陽気の虚するに因ってなり。」とあり、陽気を補うことが治療の要諦であると述べ、「問余」とは、「先ずよく虚を治し、而る後に宜しくその病む所の余を問い、之を治すべし。」の義によって名づけられている。そこには各科の疾病を統一的な病因観でとらえようという視点をみることができる。江戸時代までの日本の医学は絶えず中国医学の影響下に発展してきたが、独自の展開を示すためにはまず百科全書的な注解書がぜひとも必要であった。この意味で名古屋玄医の果した役割はきわめて大きく、「駆邪湯」「逆挽湯」「利膈湯」など

彼の創製した処方はその後の医家に広く受けつがれていった。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所）

内藤希哲の医説

丸山敏秋

江戸時代中期に台頭した古方派の医学は、吉益東洞の出現によって一つの極点を迎え、日本漢方界の一大勢力となって浸透した。その東洞より一年早い元禄十四年（一七〇一）に生まれ、東洞とは全く異なる独自の医学体系を構築したのが内藤希哲である。わずか三十五歳で世を去った希哲の名は富士川『日本医学史』にすら見えず、最近までほとんど注目を浴びることなく埋もれていた。「五経一貫」を旨とした希哲の医説は、医史学的にも臨床的にも極めて興味深い。今回は主著『医経解惑論』を通して彼の医説の特色を闡明にし、その医史学的な位置づけを考えてみたい。

希哲の医学に臨む基本姿勢は、「五経一貫」に尽きる。信州松本に生まれ早くに医を志した彼は、『万病回春』の著者龔雲林（延賢）の医説より惑いが始まり、種々の遍歴